

はなし 噺を質におく！ 昔の質屋はのどかでした

加藤 良一

むかしは、落語のネタが質草におけたというはなしがあります。

とは、いうものの今どき質屋なんぞほとんど見かけないから、若い人にはピンとこないかも知れませんね。ところで、質屋は形のあるものしか受け取らないものと思ったら大間違い。金になりさえすれば形なんぞなくともなんでも質入れできたんです。ただし、落語のなかでも十八番、つまり価値のある噺でないと受け取りませんでした。

たとえば、馬楽（のちの四代目小さん）の「長屋の花見」とか、六代目正蔵の「居残り佐平次」とか、三代目圓馬の「文七元結」とか、自称五代目立川談志の「らくだ」とか…、自他ともに認めるような逸品じゃないとダメなんです。もちろん噺家の位としては真打ちで、かつ人気もあって、貧乏しているとはいえ信用がなきゃあダメでしょうね。

金に困った噺家が質入れた演目は、その後、質から出すまではけっして高座では語らなかつたそうです。どんなにひいきの客が注文してもやらない。そこんところはきっちりと義理を果たしていました。

「師匠、近ごろあの噺ちつともやらないね。どうしたんだい？」

「いやあ、その…あれはね…」

「どうしたい。言ってみてくれないか。」

「じつは先日ね、ちよつと入り用があつて質においてきたもんでね。」

「おや、そんなことだったんですか。で、いくらです？」

「〇分〇朱で…」

「なんだそんなもんか、じゃあ俺がうけ出してやろうじゃないか。」

「それはありがとうございます。」

さっそく質屋へ飛んで行って噺を引き取ってくる。そして、その晩から天下晴れて高座にかけたもんだといいます。のどかなはなしですね。

でも、たとえば噺家が死んでしまつて、引き取りに来なかつたらどうなるんでしょうかね。そのまま流れてしまつては質屋が丸損ということになりますが…。質流れ品をほかの噺家に売つても演じられるかどうかそちらも心配ですし…(-.-)

〔これは『定本 正岡容 寄席随筆』に載っていたエッセイを多少アレンジしたものです。有りいる〕

体にいえばパクリです。]

Wikipediaによれば、正岡 容（明治37年～昭和33年）は、作家、落語・寄席研究家。歌舞伎役者の六代目尾上菊五郎の座付作者ともいわれた人物。

あんなに寄席というもののすきなひとを、わたしは知らない。その点、わたしなんか、正岡 容の、百分の一、千分の一、とっていいだろう。文学もむろん好きだったけれど、やっぱり寄席を愛した上の、あくまで、そういう市井の文学を愛した気配がある。寄席の楽しさを、寄席の抒情を、正岡 容くらい、正直な感傷的なことばで、たたえ、書いた人もほかにはない。

- 安藤鶴夫

正岡 容を大きく評価したいのは、戦中戦後にかけて、学生層を含めて若い人々に、また、いわゆるインテリ層へ、寄席、落語への興味をもたせたこと・・・戦後間もない各大学の落語研究会は、多かれ少なかれ、みな正岡 容の影響を受けている。落語はもとより、講談、浪曲、寄席演芸の味わい方をいろんな文章で示し、これらを読んだ読者の足を実際に寄席に運ばせた。これは凄いことである。

- 三代目桂米朝

2022年1月11日

[Back](#)

[「雑感」Top^](#)

[Home](#)

[「Home Page」^](#)